



かがみ

まえがき

この度は奈良高専現代視覚文化研究会ホームページに足を運んで頂き、かつ2017年度冬会誌を開いてくださってありがとうございます。はじめまして、会長のあつこんです。

あつこどんってダサくね？なんでそんな名前なの？とか思う方もいらっしゃるかもしれませんが、そもそも自分が思いついたわけでもないです。中学時代の部活の友達が付けてくれたんです。まあ原型はもつとひどいものでしたよ(笑)

ケツデカ妖怪あつこどん↓妖怪あつこどん↓あつこどん
流れとしてはこんな感じ。イジメじゃないの？と思う方もいらつしやるかもしれませんが、全然そんなことはありません。当時はいじられキャラで通っていました(笑)

…うん、やめよう。誰得だよって話です。そもそも人前で話すのが苦手な人間でもちろん作文も苦手だけどここまで書いてる私を褒めて欲しい…っていう気持ちがあります。私なんかよりも、ちゃんと締切を守ってイラストとか小説とかを出してくださった皆さんの方がぶつちやけすごいと思います。私なんか文才もないですし、イラストも下手くそだし、気がついたらネタに走っちゃう人なんです…エへへ

真面目な絵を描いてみたいけどそもそも画力が…サンタさんにお願
いすれば良かったのでしょうか…

なんでくだらない他人任せの願望を持つのはやめよう、もつとポジ
ティブに考えよう。うん、ポジティブ思考大事！(何言ってるんだ私
)

とにかく、どれも冬休みから、それ以前から準備されていた力作
ばかりなので、最後まで楽しんでいただけたら幸いです。

拙いまえがきでしたが、ここまで真面目に目を通していただき、ありがとうございました。どうぞ、最後まで楽しんでください。それでは！

電子制御工学科二年

あつこどん

小説 作品



陰下れば陽昇る

キツタヌ

わたしは今からキミ達に新しい演目を捧げよう。
 ぼくは今からアナタ達に新しい演目を捧げよう。

アナタ達はこれを見て何を思うのかな？

キミ達はそれを聴いて何を感じるのかな？

キミ達はいつ気づくのかな？ この演目の醜悪さに。

アナタ達はどこで気づくのかな？ この演目の愚かさ

偽善 欺瞞 絶望 快樂 情熱 ……

純悪 疑念 拒絶 苦痛 切望 優越 ……

まあ、色々あるけれど

ま、様々なのだけれど

アナタ達はいつ狂うのかな？

キミ達はどこでダメになるのかな？

いつでもいいけれど

ささいなことだから

ゆつくり楽しくダメになつて下さい

せいぜい可笑しく狂つて下さい

ところで右の子

なあに？ 左の子

ぼくはぼく？ それともわたし？
 今更どうでもいいでしょ。

些細な事よ。

そんなモノは後付けなのだから

それもそうだ

それもそうね

くるくるくるくる代わつて

ぐるぐるぐるぐる変わるもの

どうせ明日は♪

スプラッタ♪

さあさあ御客人

さあさあ御客様

始まりますは一匹の獣の物語

始まりますは成り損ないの物語

山の麓からでも見える大きな桜の樹が特徴の山の頂にたたずむ古
 くからある大きな神社の境内には満開になつたばかりの桜を見に地
 元も者から観光客まで多くの人が居た。その中、墨色の髪、藤紫色
 の瞳を持ち、桜柄の被衣に狩衣を纏う者が一人、その者の周りは何
 故か人がおらず、周囲の者達もそれに気づいた様子がない。

その者が進む先には一人のご老人と一人の巫女服の女性。気兼ね
 なく話せる所までくると

「やつほ。おじいちゃん」

「久方振りだな。夜陰。百五十年ぶりか」

「……だから今は冬夏だつて。何回言えばいいのさ……。それに百四十年だよ」

冬夏と名乗った者が呆れた様子で返す。

「百六十三年ですよ」

「え？」

今度は巫女服の女性が呆れた様子で突っ込んだ。

冬夏はしばらく思い出すかの様に唸ると

「そう言えば、今回はそれぞれの滞在期間がいつもと違ったんだつた」

冬夏は納得の声を上げた。

「今回はどれ位の間、ここに居るんだ？」

「そうだなあ、気分によりけりだけど五、六年ぐらいだと思う」

「何か面白い事があれば教えてくれ」

「それは勿論」

目を輝かせて答える冬夏。

「最近は何かあったの？」

「そうだな……、中々咲かなかった桜が咲いたぐらいか」

「ちよつと時期遅れだね。そう言えば」

「コイツもそろそろ還る頃合いなんだろうな。今回も開花の一族の力のおかげでやつとだったからな」

しみじみと老人が語る。

「来たの？ アレが？ 本当に？」

「団体サマで来たんじゃないさ。はぐれたから追っかけているって言ってたがどうだろうねえ」

「へー。もう少し早く来れば良かったな」

「来なくて正解だとおもうがな」

「じゃあ行くよ。出る時には頼んだよ」

「それは良いがお前……ああ、いや何でもない。了解した」

「ありがとう」

冬夏はどこか淋しそうに笑うと踵を返して歩いていった。

「せめてここにいる間だけでも楽になっていてくれたら良いんだがな」

老人はそう一人ごちた。

おじいちゃんと別れて途中で買った団子を食べながら毎回この街に来ると泊まる宿へ歩いていると、

「お？ おお！ 冬夏じゃないか！ 久しいなあ！」

「久しぶりだね。陽太さん」

目的の宿を一人で切り盛りしている猫又の陽太さんに会った。彼女とは彼女が宿を始める時に知り合ったから中々に長い付き合いだ。

「今、一室空いていますか？」

「どんなに客が来ても冬夏の為に一室は空けてあるから大丈夫だよ」

「ええ……」

「冬夏にはお世話になったからね」

困惑する私にウインクを送ってくる陽太さん。そんな感じで色々話していたら宿のある路地まで来た。

二時間後に夕餉と言つて陽太さんが厨房に入つて行ったので、借りた部屋の鍵で部屋に入つて寛がせてもらう事にする。

――翌日――

昨日の夕餉と今日の朝餉の時にここ最近の出来事を聞いていて、一番興味を惹かれたのが『ここ』、二ヶ月で太陽の力が弱くなっている』と言う情報だ。

その影響でこの地域下で陰の気を持った妖の類が力を強めている

らしく、かなり危険な状態なんだそう。

「少しお時間よろしいでしょうか」

「なんででしょうか」

目の前に立った男の人が話しかけてきた。凄く驚いたけれど、それを顔に出さずに返答した。……出来ているよね？

「実は、貴方に折り入って御願ひがあるのです」

何やら異形のモノと複数？がつている様だが、この男性は一体何者なのだろうか？私だつて妖の端くれだから人間に負けるつもりはないけれど、？がつているモノが一斉に襲つて来るのならダメかもしれない。

案内されたのは

「寺子屋、ですか？」

「似たような物です」

男性に集まつて来た子ども達を近くで見えて理解した。この人が噂の子どもに術を教える風変りな妖術師とやらだ。名前はなんだつたか。

「あ、申し遅れていました。私、清流と申します」

「格好いい名前ですね」

「これ朝にも言つたな。そういえば。」

「ありがとうございます。それで貴女は冬夏さんですよ」

「はい。そうですけど、どちらで私の事をお知りになったのです？」

私も名乗り忘れていたけれど気にしない。気にしない。

「様々な方から貴女の事を聞かされていて、前々から気になつていたのですよ」

ほう。様々な方、とな。清流さんは異形のモノとも良い関係を築けている様だしソツチ方面含めると心当たりが多すぎますねえ。まあ別に口止めしていないし、したいわけでも無いけど……。もう良いや流そう。うん。

「それで、頼み事とは？」

「ああ、実はですね」

子ども達に聞かれない様にと奥に通される。

まあ、うん。私に出来る限りで要約すると、子ども達の式神の様なモノ(正確には違うらしい)を少し前に召喚したらいいのだけれど、本来は何年、何十年もかけて育てていくモノだから、今は大きさが大きい方が小さい方より強くなっているらしい。それで、大きい式神を持つ子が我が物顔になるのは良いのだが、小さい式神を持つ子が弱気になったり式神を低く見るのは式神が術師を喰らつてしまう可能性があるそう。だから、大きさが全てでは無い。と言う事を教える模擬試合を私に依頼したいそう。清流さん一人ですると、ワザと大きい方を負かしたと言われるだろう。とも。

ともかく、私は模擬試合をする事になった。

私が訓練場(と言うか庭なのだけれど)で準備していると、清流さんが子ども達に模擬試合の事を伝えたようで、子ども達が縁側に座り始めた。

「それで、私は何と戦えば良いのです？」

「あえて言うなら土人形ですかね」

清流さんはそう言うのと懐から小指の爪程度の大きさの容器を地面に埋めて、大きく下がった。え？そんなに下がるの？そんなに大きい？金剛力士像とか出てくる感じ？大きな音を立てて地面が隆起して現れたのは、大きな猪だった。ナニコレ。コレが走った風圧で寺子屋が吹き飛びそうな力強さが見てとれるのだけれど……。

風変りな武器の出し方で子ども達を湧かせようと思つていたのに、こんなの先に出されたら恥ずかしいじゃん。大して凄く無いじゃん！

清流さんには伝えているから私の準備が終わるまで待つていてくれている。ただ、あの清流さんの顔は見た事がある。一見いつも通りの顔だけれど、悪戯が成功した笑いを最大限に我慢している時の顔だ！

ぐぬぬ……。子ども達を待たせるのもいけないので予め地面に描

いていた陣を踏んで妖力を流し込む。すると、陣が輝き柱状に地面がせり上がる。それは、私の腰より少し上の高さまで来て止まった。柱の上部に手を持っていくと、そこが弾けて柄頭から鏢までが現れる。柄糸は藍色で目釘は黒。柄頭は金で鏢は黒。それを掴んで真上に引き抜く。手でクルリと回して持ち直してから構える。

「面白いですね。その場で創るのですか」
清流さんが訊いてきた。

「私は我流だね。剣術。なんて名乗るのも烏滸がましい戦い方をするのさ。だから私の戦い方に合った物を、ね。本来の美しい戦い方ではなく、私のはみつともなく打ち合う戦いさ」

妖力とか流し込めば強度とか増すし。この製法だと。

「なるほど」

清流さんはそう言うのと先程も見た小さな容器を庭の隅へ落した。

ブンツ

結界か。これで結界を破壊しない限り庭の外には被害が出ないってワケか。にしても人畜無害そうな顔をして怖い術を使うものだ。結界の中と外で層が違うじゃないか。下手に結界を割ったら空間と空間の狭間に落っこちて二度と返ってはこれないだろうなア。ひえ。

何の前触れもなく肉塊(いや土塊?)が突っ込んでくる。私はそこそこの妖怪だから捉えられない程ではないが、人間、それ子どもなら絶対に見えてないだろう。手加減はしてないと思ひ込ませる為なのだろうが、初手がコレとは私を信頼しすぎではなからうか。一体、誰から何を吹き込まれたのやら。取り敢えず、横によけて通り過ぎる時に一太刀。

「疾ッ」

——堅い。ふむ、清流さんは経験を積んだ小さいモノでも勝てると思う事を教えたら、大きいモノは最終的に弱くなると思ひ込まれる

のを防ぎたいご様子。だから私に術を使わない様に頼んで、妖怪の怪力でも耐えられる装甲を持ったコイツをけしかけて来たのか。最後は動力源切れで猪が倒れる。が理想なのだろうね。小さい弱いを覆すだけなら十分だろう。だけどもあ、付き合う義理は無いよね。各々の妖怪の持つ『能力』や戦いの『極地』は『術』とは関係が無いのだから使っても大丈夫。清流さんは察してくれると思っ言わなかったのだろうか。ちゃんとやわらないとサ。言葉足らずは罪だよ。私みたいな悪い妖怪は言葉の抜け道を狙って突いてくるのだから。

二、三度、突進を躲して一太刀を浴びせる事を繰り返すと、猪がピタリと止まった。すると大空に跳んだ。

「ハア？」

それは高く高く高く黒ゴマより小さく見える様になる程に。目で追っていくと、猪の後ろにあった雲から太陽が見えてきた。思わず目を瞑ると、

ゾクツ

途轍もない寒気がした咄嗟に後ろへ跳ぶと、ナニ力がさつきまで立っていた場所へ落下して来た。聞いた事も無い衝突音が止むと空から先程までではないけれど大きな爆発音が降って来た。けれど空には何もなく。在るモノは、未だ止まぬ砂煙の中から跳んでくる物体のみ。今のは肝が冷えた。まさかあんなに高くから一瞬にして落ちてくるなんて、土から出た猪なれど、妖術師が生み出したモノ。術の一つや二つ扱えたって不思議ではない。どんな技を魅せてくれるのか気になるけれど、ここで仕留めさせてもらおう。清流さんには悪いけれどね。突っ込んで来る猪の顎を全力で蹴り上げる足が砕けそうになる感覚とか初めてだよ。猪の悲鳴を無視して大きく下がる、刀身の鏢に一番近い所に右手を当てて、切っ先は猪へ。一瞬溜めて、

「宿れ。【猪】」

右手を切っ先の方へと移動させていき、刀身は薄い赤にほ

んのり発光する。

ギンリ——

その場が、空気が軋みを上げた。

殺意や敵意とはまた違うナニカ。

これが本気のモノであれば心の臓が凍り付くような威圧。

そして、猪目掛けて突進。

「破ア！」

ズ、ドンツ……

猪の腹部にぼつちり刺さった刀身に

「破ぜろ。静かに、眠れ」

と囁いて下がる。私の言葉通りに猪ごと刀身が爆ぜた。

「ふう」

「まさか業宿とは……恐れ入りました」

清流さんはそう言った。

「アレはそんな可愛い代物じゃありませんよ」

「原型の方ですか」

「今どき物知りですね。ってそうか清流さんはお友達が多いみたい

ですまんね」

「やっぱり貴女達には分かるモノなのですかね？」

「さあ？ 私に見えるタチだけと他がどうかは」

清流さんと話していたら男の子が一人、私の下へ駆けて来た。興奮した子ども達の話し合いは未だ続いているようだけど、どうした

のだろうか。

「あの、その、えっと、す、凄かった！あ、です」

可愛い。思わずニヤけてしまう。

「ありがとう」

気が付けば頭を撫でていた。

「ぼく、コイツと一緒に強くなるから！見ていてね！」

男の子は、自身の左肩に乗っている鳥の式神を指して意気込むのを見て可愛いなあ。と思っていると、その式神に違和感を覚える。

「その子、ちよつと見せてくれる？」

「うん。いいよ」

式神が飛んで……あッ。

清流さんの方をバツと見ると清流さんは苦笑いだった。時間が経てば直ぐに分かる事だし、清流さんなら喰う前に対処出来るだろうから、随分と熱心に教育しているのだな。と感心していたけれど、成程。そうする必要があったのか。この男の子は間違いない大物になるね。こんなに小さな頃から、〈三本足の〉鳥と契約しているなんて。

(休幕)

どうしたんだい？ 御客様

どうかしたのですか？ 御客人

まだ一幕目。

一回目の休憩ですよ？

自分は迷い込んだ？

お金を払っていない？

ハハハ優しいね御客人

律儀だね御客様

でもまあ去るモノは追わないよ

我々は愚者だけを食えますから

ええ賢者は

はい賢きモノは食さないのです

無事に家に帰りましたかつたら

この場所から真つ直ぐに走りなさい

最近、外では新しい周期に入ったらしいじゃないか
一定期間ごとに区切る君たちは正しいよ

狂わないようにする為にはね

おかしくならないようになる為にはね

我々二人は語る速さを変えられはしないから
せめて願うぐらいはしよう

視覚に惑わされないで

自分を強く持つて

二度と迷い込まない様にも祈っておくよ
どうか健全にね

ここでの事は全て忘れるんだ
いいね？分かったね？

さあ急げ！

.....

.....

.....

.....

.....

逃げ切れるかな？

どうだろうね

そろそろ続きの時間だ

ああ……

我々が祈るなど鳥譜がましいのかも知れない
我々が願うなど許されないのかも知れない

だけど——

けれど——

あのヒトを

あの人間を

虹の彩り

Mino

静かな湖畔で、私は絵を描いていた。

何か着想があつたわけでもなく、きつかけがあつたわけでもない。日常の一環として、絵を描いている。

手も白衣も絵の具まみれで、どれだけの時間筆を動かし続けたのか覚えていない。

日常的に絵を描くことには、ある特別な理由が存在していて、そのおかげでこんな綺麗な湖を訪ねることができたとと言える。

その理由とは『絵の世界に行ける』という事実だ。

私が特別なのか、はたまたキャンパスが特別なのか、それとも絵の具が特別なのか、私には分からないけれど、描いた絵の世界に行くことができる。

青々とした草原を描けば、まさに一面の草原に。試しに、いろいろな絵の具でぐちゃぐちゃに塗った絵を描いたら、そんな世界に着いた。

そして、湖を描けば、ここのような湖に辿り着く。

そうしてずっと、私は世界を渡り歩いてきた。たかさんの景色を見て、たかさんの人と出会ってきた。

今度はどこに行けるのだろうか、と、いつも心に期待が膨らんでいる。

近くにある鏡が、そんな私の笑顔を写し出した。

描き終わった絵に触れると、描かれた場所に行ける……はずだった。

視界が一回転して暗転して、目が覚めると、私は暗闇の中にいた。描いたはずの絵とは全く違う場所だ。もしかしたら、同じ場所なのかもしれないけれど、こうも暗いとそれすら分からない。

色もない闇の中でしばらく考え込んでいると、誰かが近づいてくるような足音がした。

「人？」

私は声をかけるつもりもなかったけれど、そんな声を出してしまふ。見えないながらも、その何かがびつくりしたような気配を感じ、それからしばらくすると、仄かな一つの灯りが着いた。

そこにいたのは白と黒だけで構成された女の子だった。服は黒く、肌は白い。灯りが着いて気づいたが、そもそもこの場所には、白と黒しかない。

彼女の持つランタンに照らされた本棚も床も、材質が木であろうことは分かるが、私の知る木の色のような、生氣のあるものではなかった。

「私は……一応、人です。この図書館の客人は久しぶりですね。ようこそ、宇宙の図書館へ」

「宇宙の図書館？」

確かに、ここは図書館の特徴をすべて有している。

モノクロの図書館。その名も宇宙の図書館。

過去に幾度となく図書館を訪ねたことがある。そのいずれもこのような白黒でなく……しかもこれほどにたかさんの書物を蔵していなかった。

「私、客人の話を聞くのが趣味なんです。ちよつとあちらで、お話しませんか？」

彼女はにっこりと笑って、座り込んでいる私の手を取り、ゆつくりと歩き出す。

——その目は、綺麗な虹色をしている。

「——あれは確か、三百十二……三百十三回目かな。ふわふわした生き物がいて、地面は空色なんだ。逆に空は草原みたいな緑色で……」

「それは楽しそうですね」

図書館に用意された机。その上に置かれたランタンを挟んで、私たちは向かい合って話していた。私が色んな場所へ旅した冒険譚を聞きたがっていたので、一方的に話しているのだけだ。

彼女はどうかやらの図書館の司書を務める役割らしく、様々な本のお話を知っていた。

「羨ましいですね。絵を通して色んな世界に行けるなんて」

「そう？ 私からしたら、これだけの本に囲まれてるんだから、もつと色んな世界のことを知っていそうだけだ」

「私が羨ましいのは、様々な色を見ることができるといいうことです。そんなホコリを被った知識なんて、この世界にいる限りは何の役にも立たないのですから」

彼女は『私にはあなたの言う空色も、草原のような緑色も分かりませんが、そんな話を聞くだけで千金の価値があるのです』と言う。

灰色の世界に生きているからか、彼女は白と黒以外の色を理解できなかった。それは、逆に私からすれば全く分からない感覚だった。産まれた時から色が存在し、気がつけば絵を描いていたのだから、分かるわけがない。

「司書さんはさ、私に聞かせられるお話をたくさん知ってるでしょ？ だから聞かせてよ。私はもう、いっぱい話したから」

彼女は少し驚いた顔をして、それから傍げに微笑んだ。

彼女の言う、無意味な知識だとしても、私は彼女なんかより無知なのだから、私にとってはとても意味のある話だ。まさに『千金の価値』がある。

「分かりました。私がお話ししましょう。まずは……」

灰色の火を灯すランタンが、語り続ける二人だけを照らしていた。

不思議の国へと迷い込む女の子の話、小鳥と少年の話、沢山の寓話が始まり、そして一つ一つと終わっていく。

ずっと続くように感じられた、とても楽しい様々な物語が終わったので、私は旅立つための画材を取り出した。

しかし、ここで問題が発覚する。

「絵の具が全部モノクロになってる……」

そもそも、この世界に来た時点で、自分の肌がとても血色の悪い灰色になっていることに気づいていたので、色のあるものはすべてモノクロになるのではないか、という疑念を持っていたのである。

「どうしましたか？」

「え、見れば分かるでしょ……じゃなかった、色が分からないんだよね……これ、本当は白とか黒だけじゃなくって、もつとたくさんの種類の色があるんだけど、全部モノクロになっちゃってるんだ」

「ほ……？」

説明してみたものの自分でも分からない。見てきたものの相違の壁は言語などでは超えられないのだと学んだ。

「描けないならもう少し滞在するしかないかな……幸い、たくさん本があるし、どれかの本に解決法があるかもしれない」

「そんな……そもそもそのモノクロというのはこの世界では自然ですし、私も解決法が掲載されている本など知りませんし……」

「そうは言っても、人は試さざるを得ないでしょ？」

私は手頃な本棚に手を伸ばす。

無謀だった。

こんな規模の図書館だ。解決法が無いとは言わせない。しかし存在したとして、その目当ての本を見つけ出すのなんてそもそも不可能だ。

「まるでそんな話が無い……何冊読んだかな、本……」

私はそもそも本を読むのが苦手であり、読んでいる途中で音を上げてしまう。

そんな私を見て、彼女はため息をついた。

「司書ですから、この図書館にある本全ての内容ぐらい知ってます……それで言いますが、そんな解決法が載っている本は知りません」つまり、存在しません。

と、彼女は告げた。

私の本を漁る手は止まる。

「そ……そんなのなんて分かるのさ？ 司書さんって、ここの本全部読んでの？ まさか」

「当然読んでますよ……ここを管理するものとして」

平然とした顔で答える。とんでもない読書家だった。

「とはいえ、本棚と本棚の隙間とかに本隠されたりとか……そもそも隠されてる部屋があるとか……」

「そんなものありませんよ……私はこの図書館そのものなんですから、分かります」

絶句した。

彼女は図書館そのものだったのか。

「それは……初耳……なんだけど」

「言っていませんでしたから」

胸を張られて言われても。

「……ということは」

私は彼女の答えによってある一つの想像をする。

彼女が色を知らないから、この図書館に色が無いのではないだろうか？

それなら彼女が色を知ればいい。でも、どうやって？

「ど、どうしたんですか？ いきなり」

突然黙り込んだ私を心配してか、彼女が顔を覗き込んでくる。

あつ、と。

虹色の目が、私を覗き込んでいた。とても綺麗な、虹色の目が。

「そうだ……虹色の目だ！ 司書さん、今まで自分の顔見たこと無いでしょ！」

「え、えつと……無いですけど」

自信なさげに彼女は縮こまるが、そんなことはどうでもいい！

「すぐく！ すぐ綺麗な虹色の目をしてる！」

私は画材の中から鏡を取り出して、彼女に渡した。

彼女は鏡を握り、まじまじと見つめる。

「……これが……私の目……！ 綺麗ね！ とても……綺麗……」

彼女が笑う度に、世界が色付いていく。絵の具も本も、手のひらも服も、彼女も私も。

絵の具がキャンバスを彩るように、色の無い世界に色が取り戻されていく。

そんな光景を、私は一生忘れることはないだろう。

しばらくして、私が絵を描き上げると、彼女は嬉しそうに称賛してくれた。とても鮮やかな絵ですね、と。

描き上げるまでに、彼女に様々な色を教えてあげた。赤や青、緑に黄色、紫や茶色。世界は様々な色に満ちていると。

「それじゃあ、私はそろそろ行くね」

私は称賛の礼もそこそこに、もう旅立つことを告げる。ちよつとした事件もあつたけれどとても価値のある……いや、価値の付けられない時間だった。

「……はい……」

悲しそうに彼女は答える。思えば彼女にとつてもこれだけ語り合える経験が珍しかったのかもしれない。

「じゃあ、私はこれで……」

私が完成した絵に触れようとした瞬間、彼女が私の手を掴んだ。

「私も連れて行ってください！」

「え」

私は絵に触れないようにしようと試みるも、時すでに遅く、手指の先が絵に触れてしまった。

視界が暗転し、世界が反転する。

気がつけば、また新しい絵の世界へと辿り着いていた。画材も自分もいつも通り、けれど違うのは、一人の少女が私の手を握っていること。

孤独な世界の旅路に一人、道連れが増えてしまった。彼女はあの

図書館を離れて困らないのだろうか？

自分の手を握る彼女を見る。

——旅のことを話せる人がいるのも悪くなさそうだな。

そんな思いを胸に、私は再び筆を握る。

一面の緑と高く澄み渡る青空は、決して消えない鮮やかな色を湛えていた。

おしまい



イラスト

作品

Clare





猫
い
かん

あとがき

きな粉もち

こんにちは！会誌の編集を担当しております、きな粉もちと申します。

現代視覚文化研究会2018年冬会誌『こがらしのつき』を読んでくださりありがとうございます。いかがでしたでしょうか？

最近では寒かったり暖かかったり昼は大丈夫でも夜はそうでなかったり……とにかく気温の変動が激しいですが、みなさんはどうすごしていますか？私はこう気温の変動が激しいと高確率で喉をやつてしまい、一日声が出せません。まあああ不便です。だからスマホのメモ帳か何かに言いたいことを打ったり、身振り手振りで伝えたり、本当に伝わらないときは小さい声で話したり……、なんにせよとにかくめんどくさいです!!！

あと、気温の変動が激しいと服装も大変なんですよ。朝寒いなあって思ったらお昼暑いし、んで調子の上着脱いでたら夕方また寒くなってきたり夜にもっと寒くなつて……。あとは一日暑い日が出て「やっとな暖かい春がきたのか!!!」っておもったら数日経てば冬の寒さに逆戻りしたりして「さつむ!!!」っておもったり。やっばり夜には何か羽織るようなものが必要ですね。

そういえば、新しく現視研の編集をしてくれる後輩ちゃんがありました！なので編集の後継ぎを行っているのですがこう後継ぎをして思うのが、人に教えるというのはとても難しい、ということですね。私は言葉にして伝えるのが下手くそというかよく擬音を使ったりよくアレとか使ったりする人なので文で教えないといけないのがとても大変でした……。なのでスクリーンショットをいっぱいして、無い語彙力を必死に使って教えてました。なんとかちゃんと教えることができたと思います……。ということですが編集するのはこれで最後です。おそらく次の会誌のあとがきは後輩ちゃんが書いてくれると思うので、よろしく？お願いします。

改めまして、現代視覚文化研究会2018冬会誌『こがらしのつき』をよんでくださりありがとうございます。またいつかどこかでお会いできることを願っております。それでは！